

早野勘平腹切の段

早めて急ぎ行く

母は後を見送りく

「ア、よしない事言ふて娘もさぞ悲しかろ。オ、こな人わいの、親の身でさへ思ひ切りがよいに、女房の事ぐづく思ふて煩うて下さんな、ヤア。この親仁殿はまだ戻らしやれぬ事かいの。こなた逢ふたと言はしや

つたの」

「成程」

「そりやマアどころで逢はしやつて、どこへ別れて往かしやつた」

「されば、別れたその所は、鳥羽か伏見か淀竹田」

と口から出次第

めつぼう弥八、種が島の六、狸の角兵衛、所の狩人三人連れ、親仁の死骸に蓑打ち着せて戸板に乗せ、どやくと内に入り

「夜山仕舞うて戻りがけ、これの親仁が殺されてゐられた故、狩人仲間が連れて来た」

と聞くより、『はつ』と驚く母

「何者の仕業、コレ智殿、殺した奴は何者ぢや、敵を取つて下されなう。コレ親仁殿々々々」

と呼べど叫べどその甲斐も泣くより他の事ぞなき

狩人共口々に

「オ、お袋、悲しかろ。代官所へ願うて詮議して貰はしやれ。ア、笑止々々」

と打ち連れて皆々我が家へ立ち帰る

母は涙の隙ひまよりも勘平が傍へ差し寄つて

「コレ智殿、よもやく、よもやとは思へども合点が行かぬ。なんぼ以前が武士ぢやとて、舅の死目見やしやつたらびつくりもしやる筈。こなた、道で逢うた時金受け取りはさつしやれぬか。親仁殿が何と言はれた、サ言はつしやれ、サ何と。どうも返事はあるまいがの。ない証拠は、コレこゝに」

と勘平が懐へ手を差し入れて引き出だすは

「さつきにちらりと見ておいたこの財布。コレ、この様に血の付いてあるからは、こなたが親仁殿を殺したの」

「ヤ、それは」

「それはとはく、エ、わごりよはなう。隠しても隠されぬ、天道様が明らかな。親仁殿を殺して取つたその金や誰に遣る金ぢや。ム聞こえた。身貧な舅、娘を売つたその金を中で半分くすねておいて、皆遣るまいかと思ふてコリヤ、殺して取つたのぢやなア。今とい

ふ今までも、律儀な人ぢやと思つて騙されたが腹が立つわい。エ、こゝな人でなしめ。あんまり呆れて涙さへ出ぬわいやい。なう愛しや与市兵衛殿、畜生の様な聲とは知らず、どうぞ元の侍にしてやりたいと、年寄つて夜も寝ずに、京三界を駆け歩き珍財を投げうつて世話さしやつたも、かへつてこなたの身の仇となつたるか。飼ひ飼ふ犬に手を喰はるゝと、ようもくこの様に惨たらしう殺された事ぢやまで。コリヤこゝな鬼よ蛇よ、父様を返せ、親仁殿を生けて戻せやい」

と遠慮会釈もあら男おのこの髻たげを掴んで引き寄せく叩き付け
「つだく、に切りさいなんだとて、これで何の腹はらが癒なごよ」

と恨みの数々口説き立てかつぱと伏して泣きあたる

身の誤りに勘平も、五体に熱湯の汗を流し、畳に喰ひ付き天罰と思ひ知つたる折こそあれ

深編笠の侍二人

「早野勘平在宿をし召さるか。原郷右衛門、千崎弥五

郎、御意得たし」

と訪へば

折悪けれども勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出で迎ひ

「これはく、御両所共に見苦しきあばら家へ御出で、忝なし」

と頭を下ぐれば

郷右衛門

「見れば家内に取り込みもあるさうな」

「ア、イヤ、モ些細な内証事。御構ひなくともいざま

づあれへ」

「然らば左様に致さん」

とずつと通り座に着けば

二人が前に両手を付き

「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、申し開かん詞もなし。何卒某が科御赦しを蒙り、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に御両所の御取り成し、偏へに頼み奉る」

と身をへり下り述べければ

孝者、御前方の手に掛けてなぶり殺しにして下され。

わしや腹が立つわいの」

と身を投げ伏して泣きあたる

聞くに驚き兩人刀追取つて、弓手馬手に詰め掛けく

弥五郎声を荒らげ

「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよとは言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳に入るまい。親同然の舅を殺し金を盗んだ重罪人は大身槍の田楽刺し。拙者が手料理振舞はん」

とはつたと睨めば

郷右衛門

「渴しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて調へたる金と推察あつて、突き戻されたる由良助殿の眼力、ホ、天晴れく。さりながら、ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判官の家来早野勘平非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかりが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こなく、

郷右衛門取りあへず

「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として多くの金子御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせしその方の金子を以て御石碑料に用ひられんは、御尊霊の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ、金子は封の儘相戻さる」

と詞の中より

弥五郎懐中より金取り出だし、勘平が前に差し置けば

『はつ』とばかりに気も顛倒

母は涙と諸共に

「コリヤこゝな悪人面、今といふ今親の罰思ひ知つたか。ハイく、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年寄つて後生の事は思はず、賀のために娘を売り金調へて戻らしやるを待ち伏せして、ア、アレあの様に殺して取つた金ぢやもの、天道様がなくなば知らず、何でく御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当て、下されぬは、神や仏もエ、聞こえませぬ。あのない

こなくく、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御身はどうしたものだ。左程の事の弁えなき汝にてはなかりしが、いかなる天魔が魅入りし」

と鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば

堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を抜くより早く腹へぐつと突き立て

「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を殺せし事、亡君の御恥辱とあれば一通り申し開かん、兩人共にまづ、まづ、まづくくサ聞いてたべ。ムウ、夜前弥五郎殿の御目に掛かり別れて帰る暗紛れ山越す猪に出合ひ、二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探り見れば猪にはあらで旅人、南無三宝誤つたり。葉はなきかと懐中を探し見れば財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども、天より我に与ふる金とすぐに馳せ行き弥五郎殿にかの金を渡し、立ち帰つて様子を聞けば、撃ち止めたるは、撃ち止めたるはわが舅。金は女房を売つた金、か程までする事なす事、いすかの嘴程

違ふといふも、武運に尽きたる勘平が身の成り行き推量あれ」

と血走る眼に無念の涙

子細を聞くより弥五郎ずんど立ち上り、死骸引き上げ打ち返し、『ムウ、ム』と疵口改め

「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれどもこれは刀で抉つた疵。勘平早まりし」

と言ふに

手負も見てびつくり

母も驚くばかりなり

郷右衛門心付き

「イヤコレ千崎殿、ア、これにて思ひ当つたり。御自分も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けたる旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ見限つて勘当したる悪党者。身の佇みなき故に山賊すると聞いたるが、疑ひもなく勘平が、舅を討つたは彼奴が業」

「エ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者で

と読みも終らず

苦痛の勘平

「シテその姓名は誰々なるぞや」

「ホ、才徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、その方を差し加え一味の義士四十六人。これを冥途の土産にせよ」

と懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し

「勘平、勘平、血判」

「オ、心得たり」

と腹十文字に掻き切り、臍腑を掴んでしつかと押し

「血判、仕つた」

「ア、コリヤ乗るなく。早野勘平重氏、血判相確かに相済んだぞ」

「チエ、忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」

と言ふに

母も涙ながら、財布と共に二包み二人が前に差し出だし

「ござりますか。ハア」

『はつ』と母は手負に縋り

「コレ手を合はして押んます。年寄りの愚痴な心から恨み言ふたは皆誤り、堪えて下され勘平殿、必ず死んで下さるな」

と泣き詫ぶれば

顔振り上げ

「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を伴はん」

と突込む刀引き廻せば

「ア、暫く。思はずもその方が舅の敵討つたるは未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて一功立てたる勘平、息のあるうち郷右衛門が密かに見する物あり」

と懐中より一卷を取り出だし、さらくと押し開き

「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し一味徒党の連判、かくの如し」

「勘平殿の魂の入つたこの財布、智殿ぢやと思ふて敵討の御供に連れてござつて下さりませ」

「オ、成程、尤もなり」

と郷右衛門金取り納め

「思へばくこの金は、縞の財布の紫摩黄金、仏果を得よ」

と言ひければ

「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬく。魂魄この土に留まつて敵討の御供する」

と言ふ声も早や四苦八苦

『惜しや不憫』と兩人が浮む涙の玉の緒も切れてはかなくなりにつけり

「ヤア、ヤアく、もう智殿は死なしやつたか。さてもく世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ智を先立ていとし可愛いの娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つてこれがマア、何と生きておられうぞ。コレ親仁殿、与市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」

と取り付いては泣き叫び、また立ち上つて

「コレ智殿、母も共に」

と縋り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは

『わつ』とばかりにどごと伏し、声をはかりに嘆きしは、

目も当てられぬ次第なり

郷右衛門突立ち上がり

「これく老母、嘆かるゝは理ことわりりなれども、勘平が最

期の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡いりようきんしせば満

足あらん。首に掛けたるこの金は智ちと舅ななぬかの七七日。四

十九日や五十両、合はせて百両百ヶ日の追善供養、後

懇ろに弔はれよ。さらばく」

「おさらば」

と見送る涙

見返る涙

涙の浪の立ち帰る、人もはかなき次第なり